

100校プロジェクトの教訓

教師が相互に情報を共有、「点」から「面」に

早稲田大学IT教育研究所 宮澤賀津雄 客員助教授（前・川崎市立川崎総合科学高校）

<米国情報ハイウェイ構想>

平成5年に米国で情報ハイウェイ構想が発表されたのを受け、日本におけるインターネットの可能性・世界の状況について講演会が行われました。石田晴久先生（東京大学）、村井純先生（慶応義塾大学）、後藤滋樹先生（当時NTT、現・早稲田大学）が講演し、その中で「ドメインさえ取れば、アカウントの発行は無限」という話を聞き、「インターネットにつながさえすれば、生徒一人一人にアカウントを発行できるのでは」と考えたのです。



その後、東京大学に石田晴久先生を訪ね、相談にのっていただき、川崎総合科学高校が東京大学の大型計算機センター経由でインターネットにつながり、ドメインを取得することができました。

<日本インターネット協会が誕生>

その後、日本インターネット協会が誕生し、「教育部会」ができ、私もそのメンバーとして関わっていました。関係者は全部で20人程度だったと思います。

そうした中、村井純先生から「全国の学校にネットワーク利用環境を提供しようと思っている。どういう学校を接続すればよいと思うか」と聞かれ、協力を要請されたりしていました。

実践の経過、教訓

<100校プロジェクトが開始>

100校プロジェクトは、「ネットワーク環境とデジタル機器の提供」を組み合わせた点が画期的であったと思います。一般に考えられているように、100校プロジェクトはネットワークの利用環境だけを提供したわけではなく、当時出たばかりのデジタルカメラも配布しました。また後年、中央教育審議会の議論にも影響を与え、高校普通教科「情報」、中学「情報とコンピュータ」が誕生する下地を作ったと思います。

100校プロジェクトの効果

当時の学校は現在に比べると閉鎖的で、先生同士の情報交換が十分ではありませんでした。コンピュータやデータ利用もスタンドアロンでした。こうした状況がネットワークによって「一人が作った教材やコンテンツを様々な人に使ってもらうこと」ができるようになりました。閉ざされていた学校がネットワークを通じてつながり、先生方相互が情報を共有できるようになったこと、これが100校プロジェクトの最大の効果であると考えます。ヨコ（他校）と連絡・連携を取る、困ったら他校の関係者に聞くなど先生方のマインドが徐々に変わっていったと思います。

100校プロジェクトの遺産

100校プロジェクトから派生的に生まれたものに、インターネット教育利用研究会、柏インターネットユニオン、とうきょうED研究会、神奈川インターネット教育活用研究会、東海スクールネット研究会、中国・四国インターネット協議会といった地域の研究会がある。同プロジェクトに参加した先生などを中心に、地域におけるネットワークの教育利用の促進やサポートを目的に現在も活動が続いている。

また、100校プロジェクト参加校のメンバーなどが全国から結集して作られたものに、「K12『インターネットと教育』研究協議会(<http://www.k12.gr.jp/>)」やインターネットの教育利用のサポート機関として「JERIC (http://www.jeric.gr.jp)」がある。ICTに関わるシンポジウムや全国プレゼンテーションコンテスト開催のほか、教育に関する情報提供を行っている。

また、100校プロジェクトは、ICTが教育の実際の現場に利用できることを示す非常に良いショーケースであり、実証事業でした。教育関係者が様々な発表事例を視察しにいきました。「点」の動きが「面」になったと思います。

例えば、何か新しいものをやろうとした時に、「本当にうまくいっているの？」などと、そのプロジェクトの成否の見通しに係ることを質問されると思います。そうした時、周りの人は、他で行われている成功例があれば安心する訳です。

そこで、「どこでやっているの？」と聞かれても、すぐに「あそこだ(100校プロジェクト)」と言えた訳です。しかもそれは、1か所のみ存在する訳ではなく、100か所あったわけです。他の方に対する「エビデンス(証拠)」、説得の材料としては十分であったと思います。

さらに、CECの発表会なども大きな役割を果たし、地域の先生方の活性化に非常に良い影響を与えたと思います。先生方はCECの地域ごとの集まりや東京の成果発表会、先生方の研究会で聞き学んだことを、「自分にもできるかもしれない」と思って各学校に戻って実践されました。例えば、ある先生がパワーポイントを使って優れたプレゼンテーションをされると、多くの先生がそれに感化され、以後そうしたプレゼンテーションが盛んになったといったエピソードがあります。

影の部分について

当時から「児童生徒がネットワークの加害者、被害者にならないように」ということは盛んに議論されていました。しかし、その後、社会におけるインターネットの普及が学校での普及を急速に追い抜いていきました。その結果、「学校で気をつけなければいけなかったこと」が、十分教えられないままになってしまいました。また、現在は教える先生にとってもインターネットの存在が当然のものになっているため、その怖さについて余り意識しなくなっているようです。

今はインターネットが良い道具になるか悪い道具になるか岐路に来ているのではないかと思います。

10年間を振り返って

教育における変化

100校プロジェクトは、時代の必然性であったものの、教育のシステムを変えたと思います。学校に大きな影響を与えました。もちろん、「インターネットでも教育は変わらない」と言う先生もいます。確かにそれは的を得た点があり、インターネットが出てきても「変わらない領域がある」ことは事実だと思います。しかし、同じ教育でも、時間の経過やテクノロジーによって時と共に内容が変わることがあるように思います。例えば、私の専門の通信を例に取りますと、電信 音声 FAX 静止画 動画と推移するにつれて、音、画像、絵など伝達可能な中身は変わっています。

教育におけるICT利用もこの例えのように、変化があるのではないのでしょうか。

<今後へ - 100校プロジェクトの教訓>

100校プロジェクトは、「現場のニーズ」と「現場の先生方の力」と「企画」が繋がってこれだけのパワーを出せたのだと思います。

一方、教育の現場には問題点が整理されているものの、実際の解決策が見つからないものがたくさんあります。そうしたことを理解して、現場の問題点をくみ上げていくことが今後も重要であると思います。

最近、文部科学省をはじめ、各省庁や自治体の方々とお話をする機会がありますが、どなたも「日本は人材をどう育てるかが重要」という点で一致しています。人材をどう育てるかという時、手だけ、紙だけということはもはやありません。多様化する子どもたちに対して限られた人数でどうやって教育をしていくかという時、コンピュータとネットワークは補助道具として不可欠なものになっています。



プロジェクトメンバーが大集合！
「インターネットと教育フォーラム2000」にて